

開墾小舎からのバードウォッチング

永田洋平

私と野鳥とのつきあいは、私がこの根釧と呼ばれる原野に移住したのが1932年だったから、もうちょうど60年ということになる。その頃の開拓移民の住居というものは、その付近の森から伐り出した生木(なまき)を、皮を剥ぐこともなく柱にし、それをまた生木の板で囲った上に、トドマツの原木を縦に薄く裂いた割炬(つきまさ)で屋根を葺いただけの、文字通りの掘っ建て小舎であった。現在はやりのログハウスとか、木造りの家といえれば格好も聞こえもい



学校のカラマツの枝に営巣したベニマシコ

いが、その頃の移民の開拓小舎とも呼ばれた掘っ建て小舎は、常識では到底考えられない粗雑な作りで、無数に開いた板の節孔や透き間から濃霧や風雨や吹雪が容赦なく吹き込むなどして、数年と経たぬうちに大方の柱から樹皮が剥げ落ちてしまうものだった。

しかし、こうした未開地での生活は、当時はまわりの開拓者といい、移民がみなそうであったせいもあってか、私たちにはそれほど苦にはならなかった。というより、むしろそうであったがゆえの大きな楽しみもかなりあったのである。私の出身地である富士の裾野は、名うての野鳥の楽園であったが、そこよりさらに種も数も圧倒的に多かったのが、この根釧原野であったからだ。居ながらに、というよりこの粗悪な小舎そのものが、自然をのぞく素晴らしいブラインドであった。この小舎のまわりで営巣した鳥は、当初アオジやビンズイやキビタキのほか、アカゲラやコゲラといったキツキ仲間だったが、森やブッシュがひらけていくにつれて、ヤマシギやオオジシギやエゾライチョウといった地上性の鳥たちの巣なども普通にみられるようになり、次いでノゴマやエゾセンニュウやコルリといった鳥たちの姿が目あたりにみられるようになった。キツキの仲間では、アカゲラやコゲラのほか、コアカゲラやオオアカゲラなどが毎年のように飛来したが、長い冬の明けると3月の初旬から中旬にかけて、きまってクマゲラが姿を現した。そしてほとんど直線的に森からとんできてはその都度、激しい爪音をたてて小舎の屋根にとりついた。ほかでもない、この開墾小舎が腐植しはじめた頃から、キツキの飛来が増え出し、ついにクマゲラの登場となったのである。最初にまず屋根の炬をつつき壊し、次いでその屋根炬を支えている棟木の皮を剥がして、そこから虫のサナギや卵をくわえ出すという寸法である。

数度だけではあったが、このクマゲラが、まだ家中が床に入っている早朝にやってきて、屋

根の孔から木屑や珪の破片を大量に部屋にふりまいていったことがあった。掘って建て小舎にはもともと天井などなかったから、その真下に寝ていた私たちは、枕もとといわず、布団の上といわず、もろにこの破片を被ってしまった。しかしこのとき、その屋根の孔の開口から、じっと下の様子を怪訝な顔つきで見下ろしている当のクマガラの面影と、あの瞬くたばにみせる白く美しい臉が、素晴らしく印象的でさえあったのを、今でもはっきりと覚えている。

こうして今日にして振りかえれば、昭和初期の頃のこの掘って建て小舎での生活は、暮しむきはまったく苛酷の一語につきたが、その反面では、またこれほど充実した日々とてなかったようにも思える。

私が現在いる温泉街の小学校（その頃国民学校と呼んだ）に赴任したのは、1942年の春であったが、ちょうどその頃は太平洋戦争のはじまったばかりのことで、世はまさに戦争一色。街はもとより原野の分教場でも、男の子は木銃を、女の子は白鉢巻に薙刀といういでたちであった。しかしその一方では、当時としてはまったく予想外とも云える「自然の観察」という教科が4年以上の学年に課されていた。各教室の出入口近くか教卓の横にその観察ノートが必ず一冊づつつり下げられていて、それに吾が家や学校のまわりの、あるがままの自然やその季節の移り変りの生きものの様子などを書き込むことになっていた。そこには都会（その当時の）では観察することのできない野鳥の営巣や、その環境や、あるいはまた河川へのサケ・マスなどのそよやその産卵の様子などが、克明にそれもエネルギーに書き込まれていたものである。私のいた学校の教室の直ぐ窓下にもアオジやノゴマやエゾムシクイが巣作りをしたし、またそこから100メートルほど先を流れている川の土手では巣孔に通うヤマセミの姿がみえたが、そうしたことが少しの誇張も粉飾もなく細やかに綴られていて、ともすれば戦争のとげとげしさに沈みがちな心を和らげられたことさえあったことをよくおぼえている。

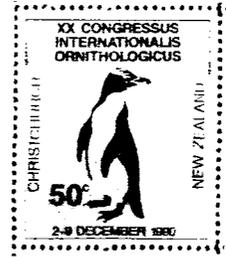
学校でのバードウォッチングといえは、もうすでに廃校になってしまったが、阿寒国立公園の南（釧路側）の入口付近の道路ぎわに徹別（てしべつ）小学校があった。その校舎の周囲には、開校時にPTAの人たちによって植えつけられた数十本にも及ぶエゾヤマザクラがあり、毎年初夏の7月ともなると、枝もたわわにつぶらな実をつけ、時期になると、これもまた数百羽にも及ぶアオバトがそこに群れ集ってきては、それを啄みながら、終日あの異様なアオー・アオーの大合唱を繰り返していたものである。教室の窓という窓がみな開かれていて、授業中の教師と児童たちの姿がよくみえたが、その数メートルと離れていない窓の矩形の空間にも好物のサクランボにすがるアオバトの姿が大きくスイングしていた。子どもたちにもアオバトにも、不思議なほど緊張感とか違和感というものはない。

今わたしの住まっている街なかの家の、裏手の窓からほんの目と鼻の先のアキニレの木に、数年前にアカゲラの穿った小さな巣孔がこちらに向けて開いている。アカゲラが1ヶ月以上にもかけて孔を穿ち、それが出来上るころ、渡ってきたばかりのニューナイスズメに奪取され、さらにコムドリに占拠されるといったまさに建設と破壊と修復と略取を重ねてきたいわくつきの巣孔である。今年もアカゲラが、その木の裏側に新しい孔を掘り始めている。何のことはない。恐らくはまた去年と同じパターンで争奪が繰り返されるだろうと思っている。動物の世界では、同種間には大方厳格なテリトリーという不文律があって、この規律はそうやすやすと乱されるものではないが、このことは、また一方では異種間、つまり他の種にまでは及ばないのである。

ふりかえると、北に移ってからの私の住み家は、開墾小舎といい、原野の学校といい、そのものがブラインドでもあった。その美しい環境や自然の再現に意を注ぐことなど、いうまでもなく至極当然のこのように思えたのである。

ニュージーランドでの 国際鳥学会議 (IOC)

第20回国際鳥(類)学会議は、昨年12月2～9日にかけて、ニュージーランドのクライストチャーチにあるカンタベリー大学で開催された。日本からも30数人が参加して、1,500以上の研究発表が行なわれた。今回、伊藤基金による参加者も含め、5人の方に印象記を寄せてもらった。



(提供・中村司氏)

第20回国際鳥類学会議に出席して

樋口 広 芳

海外で行なわれる国際会議に出席する楽しみは4つほどある。1) 第一線で活躍している研究者のすぐれた研究発表が聞ける、2) 自分の研究を世界の研究者に広く知らせることができる、3) 同じ関心、興味をもつ研究者との交流を深めることができる、4) 開催国の自然を見てまわるよい機会をもてる、の4つである。第20回国際鳥類学会議を振り返ってみて、その4つが私にとってどうであったかをのべてみたい。

講演数は1,500以上

まず、発表された研究内容であるが、今回は講演数が特別講演、シンポジウム講演、口頭発表、ポスター発表などすべて含めて1,500件以上あった。分野は分類、生物地理、生態、行動、音声、渡り、保護など、鳥類学のあらゆる分野にわたっており、そのそれぞれにバランスよく相当数の発表があったように見える。私はおもに、生態、行動、保護関係の講演を聞き、特別講演はなるべくすべて聞くようにした。興味深い講演はいろいろあったが、とくに印象深かったものとしては次のものがあげられる。J. Craigの協同繁殖をめぐる諸理論の検討と課題、P. Escalanteによる分子レベル、形態上の特徴両面から見たカオグロアメリカムシクイ属 (*Geothlypis*) の種分化過程、H. Weimerskirchらによる人工衛星を利用したワタリアホウドリ (*Diomedea exulans*) の行動追跡、T. C. Grubbらによる種間競争の存否を明らかにする新研究方法、M. P. Wallaceによるカリフォルニアコンドル (*Gymnogyps californianus*)

を放鳥する前段階として試みたコンドル (*Vultur gryphus*) の放鳥計画。

J. Craigの協同繁殖についての講演は、協同繁殖をめぐるこれまで提出されたいろいろな理論を再検討したもので、血縁選択、包括適応度などの安易な適用を批判する内容にもなっていた。もっともこの特別講演は、話の内容もさることながら、かかわりのある主要な研究者を何人かの「役者」が演じるという趣向も疑らされていておもしろかった。P. Escalanteによるカオグロアメリカムシクイ属についての講演は、電気泳動の結果や羽色、骨格などの特徴から種分化の過程を再構築したもので、単一の形質にかたよらない研究方法と、結果の整理の仕方の明快さがきわだっていた。

H. Weimerskirchらによるワタリアホウドリの行動追跡は、抱卵期の雄の採食行動について報告したもので、1回の採食行で3,600～15,000kmも移動することなどを明らかにした。T. C. Grubbらによる種間競争についての講演は、栄養状態が風切羽に成長帯として出ることを利用して、近縁種を除いた場合に成長帯の幅に増減が出るかどうかを報告した。例数が少ないので結論は出せないようであったが、新しい研究方法として注目されることになるだろう。M. P. Wallaceによる希少種カリフォルニアコンドルについての講演は、まだ数の多いコンドルをカリフォルニアコンドルの放鳥予定地に放して、カリフォルニアコンドルの放鳥後に予想される採食条件や事故などを推定したものである。

ポスター発表とラウンドテーブルに参加

私自身は、ササゴイの投げ餌漁の起源と発達についてポスター発表し、またラウンドテーブルで、人工衛星によるコハクチョウの渡り追跡の結果を話した。ササゴイの投げ餌漁については、熊本の水前寺公園と米国、フロリダでの自分自身の観察結果に、文献中にあるいくつかの例を加えて、投げ餌漁の発達過程を推定した結果を報告した。人が水面に落した餌に魚が集まってくるのを見て餌を拾うことを始め、やがて、人が投げた餌がないときに小枝や葉などの自然物を疑似餌として使うようになり、ついには、枝を二つに折って疑似餌を作るまでになった、という内容だった。ただし、人が餌を与えない自然の条件の中で、樹上から落ちてきた葉や昆虫に魚が反応するのを見て、一部の「天才ササゴイ」が投げ餌漁を始めた可能性もある、とものべておいた。

ササゴイが投げ餌漁などといったことをすることを知らない人ももちろんいたので、けっこういろいろな人がやってきた。また、これまでに書いた関連の論文の別刷を4種類、各20部ずつポスターの下においておいたが、すべてなくなった。立ちっぱなしで何時間も説明したので疲れたが、関心をもってくれた人という話ができ、また関連のあるいくつかの情報も得ることができたので有益であった。

ラウンドテーブルはいくつかテーマを定めたものがあつたが、私が出席したのは、人工衛星を利用した行動追跡についてのものだった。このラウンドテーブルでは、衛星用の送信機の種類やその装着法などに多くの人の関心が集まった。送信機の開発は、欧米でも行なわれているが、今のところ日本で最も進んでいる。そうしたことから、日本で実施したコハクチョウの渡り追跡は、非常に注目されることとなった。同じ型の送信機を今すぐにも入手したいという人が何人かいたし、今後の共同研究を提案してくる人もいた。送信機を開発したNTTの宣伝に行ったような感じにもなってしまったが、この方面の研究に強い関心をもつ人が多いのを実感した。

いろいろな出会い

会期中、講演や発表の場以外でたくさんの人と出会い、話す機会をもつことができた。1986年から1988年まで滞在していた米国、ミシガン大学の友人、知人との再会は、とくにうれしかった。また、今春、インドからソ連に渡るツルを共同で衛星追跡する予定になっているインドや米国の研究者、5月に日本のブナ林の鳥を調べに来る米国の研究者、日本の海鳥類の現状について問い合わせきていたカナダの研究者などと、ゆっくり話し合うことができたのは好都合だった。そうしたいろいろな相談をまとめてできる機会というのは、なかなかないものである。

もうひとつ、近隣のアジア諸国の研究者との出会いも楽しいものだ。地理的に近いところにいるのでほかの会議でも会う機会があるのだが、中国、台湾、韓国、タイ、インドなどの研究者は、休み時間や昼食時などに一緒にいることが多かった。もっとも日本の研究者は、私と2、3の人を除いては、あまりその中に入ろうとはしていないようだった。私は日本の鳥類相や固有種の起源などに関心をもっているので、かかわりのある国の研究者には積極的に接することになっている。今回は、とくにインドやタイの研究者から、近縁種についての情報を得たり、現地調査するさいなどの注意を聞いておいた。

南の島へ

海外の学会に出席する最大の楽しみは、やはりなんといってもエクスカージョンへの参加だろう。今大会のエクスカージョンは全部で30ほどあり、地域、時期、期間などいろいろであったが、私はSouthern South Island Tour というのに参加した。会議終了後、8日間の南方への旅だった。参加者は20名ほどで、米、英、独、スウェーデン、豪、ニュージーランドなどから集まっていた。日本人は私一人だった。

この旅行では、オマラマ近くのOhau湖、オタゴ半島、スチュワート島、フィヨルド地形のミルフォード・サウンドなどにでかけ、森や湖沼、海岸、島、海上などでさまざまな鳥を見た。とくに印象に残った鳥としては、次

のものがある。オタゴ半島の繁殖地で見つかったシロアホウドリ (*Diomedea epomophora*) やキンメペンギン (*Magadypptes antipodes*)、シュワート島の人おじしない無飛力のクイナ、ウェカ (*Gallirallus australis*)、マツケンジー盆地の川原にいた希少種クロセイタカシギ (*Himantopus novaeseelandiae*) とくちばしが横に曲がったハシマガリチドリ (*Anarhynchus frontalis*)、ミルフォード・サウンドで氷河を背景に見たミヤマオウム (*Nesotor notabilis*)、ミナミブナのすばらしい

森で見聞きしたエリマキミツスイ (*Prosthemadera novaeseelandiae*) やニュージーランドセンニョムシクイ (*Gerygone igata*) などである。

1週間以上も朝から晩まで一緒にいて、鳥や自然を見る楽しみを分かち合っていると、みな、自然に親しくなるものである。ニュージーランドから帰ってきて2か月ほどになるが、この旅行で一緒だった何人かの人とは、今も手紙で連絡をとり合っている。

元 気 な 女 性 研 究 者

石 田 健

ごくまじめな報告は、他の4氏がなされるらしいので、私は学会の横顔をいくつかご紹介する。まず、最初におどろいたのは、開会式会場入り口で人種差別反対デモにあったこと。オールブラックスが南アチームと対決するときなどと同様、南アからの参加者があるからで、本大会が社会的に重要と認知されている証拠でもあるのだろう。「なぜここに？」と面くらって、国際感覚の不足を改めて思い知らされた。

わが学会でも増えてきたが、女性研究者の発表も多かった。欧米の研究者が中心だが、アジアの研究者でも相対的に少ない感じではなかった。日本からは音声研究の大庭さんと海鳥の岡さんが紅二点。鳥類群集の一般講演の部会で私のすぐ後に発表したインドネシアの女性研究者は、私同様おとなしすぎて、まだまだ遠慮がち。

一方、すごく挑戦的な話し方をする人もいた。ちょっと話し方の角をとったほうがよいのではと、内容とは別のことが気になったりしたもの、後で彼女が赤ちゃんを抱いているのを見かけて、そういえば、講演中もなんとなく「かあさん」の雰囲気があったと、1才になる娘の父親として妙な共感を覚えてしまった。今大会では、有料ながら託児所の案内がなされていた。もしあったなら、ちょっとのぞいてみればよかった。

一方で、内容は記載的で割合単調なのだが、女性ならではのすごく魅力的なしゃべりかた

をした人や、岩からぶら下がっている写真で聴衆のほほえみをさそった人なども印象的だった。もちろん男性にも男性なりに、二と通りの意味で目のさめるような話し方をする人たちがいたが、元気な女性の発表は、疲れ気味の頭に清涼感を与えてくれた。

宿舎で隣室だったアメリカの美人(私の好みという意味ではなく、例えば『ダイナスティ』にでてきたような)研究者は、大会の後にオーストラリアのヘロン島で数週間調査してから帰ると言っていた。また、後でリトルバリアー島に同行したカナダの女性研究者は、大会前に2~3週間、ニュージーランド北島のキドナップース岬の大コロニーでカツオドリの調査をしてきたそう。国際学会を機会にこのようなスタイルで調査ができる、元気な彼女たちがうらやましかった。そう言えば、岡さんも同様にご活躍の様子だった。

いろいろな人と、片言の話をした。イギリスからきた海鳥研究者は、船にからっきし弱いので、調査は必死だと言っていた。どこにも、そういう人はいるもんですね。ケニアから来た研究者は、日本では森林保護がとてもうまくいっているのだろうと、うらやましがっていた。なんといっても、日本は自然に恵まれている。ベルギーの研究者は、ここはイギリスと同じでつまらないと愚痴っていた。私たちは、それも含めて、ニュージーランドの自然を楽しんできました。

「伊藤基金」始動—— 助成第1号受領者の声 ——

今後の鳥学発展のため、国際鳥学会議へ若手研究者を派遣したり、外国の鳥学者を日本へ招聘する費用を援助することを目的として、4年前の1987年、伊藤信義氏が1,000万円を寄与された。会ではその趣旨を生かすため「伊藤基金」を創設し、その利子を運用することになった（詳しくは日本鳥学会誌36巻2/3号参照）。今回その第1号として、ニュージーランドで開催されたIOCに発表する3名の若手会員に助成金が出された。そこで基金運用開始を記念して3氏に寄稿してもらった。

残念なことに伊藤氏は、この成果を見ないまま、昨年4月に逝去された。3氏とも故人への哀悼と感謝を述べられているが、誌面の都合上各氏の原文中にあった次の言葉でその意を伝えさせていただく。 ●IOCは世界の鳥類研究の現状と自己の位置を知る最良の場である。

（江崎） ●日本人の国際化が声高に叫ばれている昨今、若手研究者の国際学会参加を促す伊藤基金は、まさに当を得た企画である。（中村） ●今でもヘロン島にクロサギの調査にいらっしや伊藤博士の元気な姿が印象に残っています。（永田）

道化役者にならないためには

中村 雅彦

“イギリス以外でもっともイギリス的”と称されるクライストチャーチで、私はイワヒバリ（イワヒバリの雄の複数雄との多回交尾戦略について発表してきた。発表自体はそつなくこなしたつもりだが、質疑応答は発表逃げきりという当初の作戦通りにはいかず自らの英会話力の不足を痛感した。

聞きたいと足を運んだ講演の多くは、既に国際雑誌で発表された内容だった。論文や本で名前は知っているが顔は知らない。こんな経験は日本人同志でもままあることだが、外国の研究者ではなおさらである。しかし、ひとたび顔を覚え言葉を交わしたことがあれば論文を読むとき一層身がはいる。

協同繁殖、配偶者選択と種内托卵の講演が興味深かった。講演内容は人によりけりだが、わかりやすい発表ほど印象に残った。これは当然のことである。日本の学会でも同様である。参加者の多くはやや漫然と発表を聞いている。それを発表者の側に英語とプレゼンテーションで引き込む努力が必要である。まずは日本語できっちり自分の発表ができること。これなくしてはたとえ英語で発表しても理解されないし、派手なプレゼンテーションとは裏腹に内容がともなわなければただの道化役者になってしまう。今回の参加で、そんなことも学んだ。



サギの研究で奨学賞を受ける故伊藤信義氏(1985年)

期待していた研究者に会えず残念

永田 尚志

国際鳥学会議の開催されたカンタベリー大学構内には、クロウタドリ、ウタツグミ、チャフィンチ、ヨーロッパカヤクグリなどのヨーロッパから移入された鳥が多く、寄宿舎のベランダにやってくるクロウタドリの騒々しい囀りで、毎朝起こされました。同大学のキャンパスは広く、800人以上もの参加者を収容できる寄宿舎を持ち、箱庭のような日本の大学のキャンパスに籍を置く私には羨ましい限りでした。

私は個体群生態学、配偶システム、鳥類群集関係のシンポジウムの講演を中心に聴きました。DNA-DNA ハイブリダイゼーションを用いた生化学的分類学についてはIOC会長 Sibley のプレナリー講演がありました。

鳥類学に導入されたDNA-DNA ハイブリダイゼーション、ミトコンドリアDNAのマッピング、DNA 指紋法などの生化学的手法は適用されるレベルが異なりますが、集団生物学的アプローチには必要なかつ強力な手法との印象を受けました。欧米では予想通りDNA指紋法は当然の技術として普及しているようで、多くの研究者が利用していました。しかし、DNA 指紋法を用いた研究発表で興味を引いたのは、フルマカモメの精子間競争とアオヤマガモの地理的隔離と近親交配の2つのみで、後は予想通りの結果をDNA指紋法で確認したに過ぎませんでした。ニュージーランドで開催されたため、ヨーロッパからの参加者が予想より少なく、何人かの期待していた研究者には会えませんでした。オーストラリアの鳥類群集構造、種分化など興味深い研究発表を聴くことができたのは収穫でした。また、ニュージーランドの陸棲鳥類相は貧弱でオウムインコ類、ゴウシュウムシクイ類、オーストラリアミツスイ類の適応放散したオーストラリアとはかなり異なっている印象を受けました。

日本人主催のシンポがうれしかった

江崎 保 男

前回のオタワのIOC(1986年)の報告を私は「言葉の壁」を嘆きながらも勇ましいことを言って終わったのだが(鳥学ニュース 6:20), 4年後の結果はどうであったか? 「多少進歩したと思うものの、壁の厚さを改めて思い知らされた」と言わざるを得ないのは、恥ずかしい次第である。会議の最終日のパンケットの折りにイスラエルのザハヴィさんが「今回は英語圏の人達が非英語圏の人達のことをちっとも考えないでしゃべるものだから70%の講演しか理解できなかった」と語ってくれたのもなぐさめにしかきこえなかった。以下、この前提で報告をせざるを得ないが、演者が相手に理解してもらうために必要な努力を払った講演は(これが決して多くなかったと思いはザハヴィさんの言うところと一致している)ほぼ理解できたつもりである。

シンポジウムは個体群を意識した一連のもの、協同繁殖、種間関係をテーマとしたもの等、鳥類生態学の今後の進展に重要な役割を

果たすと期待できそうなものに出た。若鳥の行動と個体群のリクルートを関連づけたカモメの研究等面白いものも散見されたが、シンポジウムとしてのまとまりと迫力には欠け、まだこれからの方向を模索している段階かなと感じた。また、誇大広告としかいえない講演もかなりあって、国際会議は議論の場ではなく宣伝の場になっていると印象づけられた。

さて、今回私が最も気になったのは自分も含めたIOCの中の日本人の影の薄さであった。講演そのものはそんなにレベルが低いわけではないが、やはり議論の場に加わっていない。言葉の問題が大きいのと思うが、そればかりと決めつける訳には行かないだろう。日本人研究者の論文が海外の国際誌に発表されることが珍しくなくなった昨今だが、真の国際化にはまだかなりの道のりがあると思う。

最後に山岸哲さんと橋川次郎さん(オーストラリア)が「非繁殖期の社会行動」のシンポジウムを企画・運営したことを報告しておかねばならない。このシンポは日本人研究者の頭の中にあるテーマが国際会議の場で決して見劣りするどころか、将来の研究の一方を見事に指し示しているといううれしい事実を教えてくれた。これを日本の鳥類学の真の国際化への突破口にできるような各人が努力し、刺激しあうことが必要だと思う。



足もとまで近よるウエカ

- 次回、第21回IOCは、1994年にウィーンで開催される予定です。

中 村 司

山梨大学は教育学部と工学部の2学部でこじんまりとした大学であるが、教育学部としては130数名の教授陣を擁している。生物学教室は教授3人、助教授1人、教務員ら2人で生物学の全レポートを受け持っている。学生は総合科学課程の学生を合わせ1学年が7人から9人程度である。卒論の学生は1人の教官当り約2人である。学生らはそれぞれの研究室を、研究部門から種研、海藻(のり)研、虫研、鳥研などといわば愛称で呼んでいる。私の研究室は云うまでもなく鳥研で、30年間鳥の生理生態学的研究を続けている。今年は2人の学生と1人の研究生がついている。学生は小、中、高校の教師を目指しているが、近年教員の需要が少なくなり、会社、研究所、大学院進学などへの進出が目だってきている。

現在の研究テーマはプラネタリウムでカシラダカやオオジュリンを用いて渡り期の方向性など、未知の感覚による行動面の解析を行っている。学生たちは教育実習や教員採用試験などの準備に時間をさかれ、皆で協力して鳥の世話をしている。もう1つの研究部門は1年前から早稲田大学の石居進教授の指導により、渡りのメカニズムの研究に必要なホルモンの測定をトリチュウム(3H)を用いラジオイムノアッセイ(RIA)法で行っており、現在鳥のふん中のホルモンを測定している。そこへ昨年9月からアメリカのコネル大学のCarola Haas博士が、日本学術振興会の招きでPost doctoral fellow(特別研究員)として向こう1年の予定で当研究室にこられた。これは私がホストリサーチャーとなり、樋口広芳博士を始め、モズを研究しておられる方々のご援助することになった次第である。主テーマはモズの繁殖、越冬生態に関する土地利用の影響についてであるが、山梨大では生理実験も学びたいとのことである。鳥学会会員にもなりましたので、鳥を研究する若い方々には、どうぞハース博士と鳥学の交流を行い、親交を深めて頂くようお願いする次第である。

【連絡先】 住所 〒400 甲府市武田3-47 山梨大学教育学部生物学教室

電話 0552-52-1111(内線3462, 3470) FAX 0552-53-9426

〔広告〕 OXFORD UNIVERSITY PRESS より近日発売

The Handbook of Australian, New Zealand, and Antarctic Birds

Vol. 1: Emus to Ducks 2 Vols

Royal Australian Ornithological Union

Edited by Stephen Marchant & Peter Higgins

予価 50,150円

この度、オックスフォード大学出版局オーストラリア支店が刊行を始めた本シリーズは、オーストラリア鳥学会が総力を挙げて取り組んだ大作で、オーストラリア・ニュージーランド・南極地域から、記録のある現生種をすべて記載している。全5巻が予定され、この第1巻(2分冊、1,400頁)では、ダチョウ目からカモ目までを取り扱う。本文のレイアウトは、既にお馴染みの Handbook of the Birds of Europe に準じており、情報量は極めて豊富だが、読み易い様に工夫されている。原色図版は第1巻だけで96枚に及び、この地域の鳥類について、既刊のどの本よりも詳しい。オーストラリア・ニュージーランドには、キウィやコトドリの様な世界的に著名な鳥が分布している。一方、日本と共通の渡り鳥も多い。我が国の鳥学者・愛鳥家・図書館などにとって、本書が非常に価値が高くかつ有用な文献であることは、疑いない。(国立科学博物館・森岡弘之)

27×22cm/1,400 ページ/原色図版:96枚



オックスフォード大学出版局KK

〒171 東京都豊島区要町2-4-8

☎ 03-5995-3901

第4回津戸基金シンポジウムの公募

1991年度の津戸基金によるシンポジウムを公募します。下記の事項を記載の上、基金運営委員会までお知らせ下さい。応募多数の場合は運営委員会で選考致します。なお補助金は3万円以内です。

- | | | |
|--------------------------|------------|---------|
| 1) シンポジウムのテーマ | 2) 開催地と会場名 | 3) 責任者名 |
| 4) 講演者の氏名と演題(これは暫定的でもよい) | 5) 開催日時 | |

第2回国際鳥学セミナーについて

日本鳥学会は伊藤基金の利子で外国人講師を招待してのセミナーを4年に1回開催することになっています。第1回は基金からではなく、一般会計でまかないましたが、1988年10月にアメリカのオクラホマ大学のD. Mock博士を招いて、鳥類行動生態学に関する実りの多い集会を催しました(詳しくは、鳥学ニュース630参照)。早いもので、あれから3年が過ぎ、来年(1992年)は第2回目が開催される年となりました。このセミナーを更に有意義なものにするために、会員諸氏からの、次回セミナーに対する御希望・御意見等をつのります。お寄せ頂いたそれ等は基金運営委員会で検討した上で、最終的には4月の評議委員会で議せられる予定です。御意見・御希望がありましたら、3月20日まで下記までお知らせください。

以上2件の送付先: 〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部動物社会学研究室気付 日本鳥学会基金運営委員会幹事 山岸 哲

評議員選挙結果のお知らせ

1991~92年度の評議員選挙は、12月26日に開票した結果、下記の15名が当選した。なお投票総数は187票(有効票183, 無効票4)次点は中村司50票であった。()内は得票数。長谷川博(119) 樋口広芳(114) 唐沢孝一(96) 中村登流(92) 森岡弘之(85) 上田恵介(79) 藤巻裕蔵(79) 山岸 哲(79) 黒田長久(77) 福田道雄(76) 中村浩志(69) 阿部 学(67) 川内 博(56) 柿沢亮三(56) 竹下信雄(51) <敬称略>(庶務幹事)【ニュース編集委員決定】金沢大会のフリートークキングの中で話題になりました「ニュース編集委員」は、次の3名の方がお引き受け下さいました。大堀聡・花輪伸一・成末雅恵各氏【第22回国際行動学会議の案内】同会議は本会も後援団体になっています。参加費は3万円、学生1万5千円。論文発表は2月28日で締切っています。問合せ先は前号を参照下さい。【論文をご投稿下さい】次号発刊のために、あと2編の論文が必要です。至急お願いします。

〒072 北海道美唄市字美唄1610-1 専修大学北海道短大 正富宏之宛
【予告】◆本会と日本比較内分泌学会合同シンポジウム 日時:1991年5月25日(土) 13~17時 場所:東京医科歯科大学(東京・お茶の水)◆本会91年度大会 日時:1991年9月14・15日(土・日) 場所:立教大学(東京・池袋)

鳥学ニュース No.38

1991年3月5日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒169) 東京都新宿区百人町3-23-1
国立科学博物館分館内 (振替) 東京1-6599
(電話) 03(3364)2311

発行人 中村 司 編集者 川内 博・上田恵介 印刷所 文英社印刷